

幅を利かせた古着屋たち 二荒山神社の石段を寄進

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司

近年、フリーマーケットや骨董市が盛んである。両方に共通するのは古着があり、ともに有力な品物となっている。「もったいない」言葉が再認識されたのか、古着が注目されるようになったのは、資源の有効活用の上でも結構なことである。

ところで古着が見直されているといつても、宇都宮市内で常設の店で古着だけが販売されている店を筆者は寡聞にして知らない。古着に人気があるといつても、それだけで店を構える程の品物にはまだ至っていない。

ところがどうであろう、江戸時代の宇都宮には専門の古着屋が数多くあり幅を利かせていた。寛政年間（一七八九～一八〇〇）の「宇都宮町中諸職人諸商人留」によると、職人・商人合わせて五一三人が記載され、そのうち一番多い職種が古着屋であった。その数三九人で、ちなみ二番目が荒物屋で三六人、三番目が大

工で三五人、四番目が穀物屋で三三人、五番目が旅籠屋の三一人である。その古着屋は、寺町に一五人、宮島町に一二人と両町に集中し、それぞれ軒を連ねた状態であった。

このように古着屋は、江戸期の宇都宮の商人の中では、最も数が多かった。幕末の宇都宮の「商家番付」には、多数の古着屋が名を連ねている。この番付の前頭に名を連ねた古着屋に宮島町の増測伊兵衛がいる。現在宮町に店舗を構える丸伊呉服店の先祖である。丸伊呉服店は、創業が寛永年間（一六二四～一四三二）という宇都宮でも指折りの老舗で、商家番付にもあるようにもともと古着屋であった。それが呉服商に切り替わったのは明治の中頃という。一方、大関の菊地孝兵衛は、呉服商として名を連ねているが、古くは古着屋であり、寺町に店を構えていた。孝

兵衛の時代に江戸日本橋元浜町に出店、呉服問屋、白子組木綿屋の一員となり、両替商や質屋も営む江戸屈指の豪商となった。

こうした古着屋がいかに幅を利かせていたかを身近に伝えるものに二荒山神社の石垣がある。現在の石垣が築かれたのは、弘化三年（一八四六）である。石段最上部の両側にそそり立つ石垣の所、向かって右側に「古着商中」左側に「弘化三年丙午正月吉日石垣寄附」の文字が刻まれている。宇都宮の古着屋が、天保三年（一八三二）の大火で類焼した社殿の再建に合わせ、石垣を築き寄付したものである。石垣の築造にどれほどの費用を要したのか定かでないが、あれほど立派な石垣を築くには余程の金を費やしたのであろう。「古着商中」の名は、当時の古着屋たちの財力の高さを示した証である。

このように古着屋が幅を利かせることが出来たのは、それだけ古着の需要が多かったからである。当時、百姓・町人あるいは下級武士たちの中には生活水準が低いものが多く、彼らは高価な着物を作るより安価な古着を常用したのである。しかし明治期になると古着屋も次第に姿を消し、呉服商へと切り替わる。経済が発展し、古着屋を支えた低所得者が、反物を買い着物を仕立てるようになったからである。



丸伊呉服店の店蔵



二荒山神社石垣に刻まれた屋号